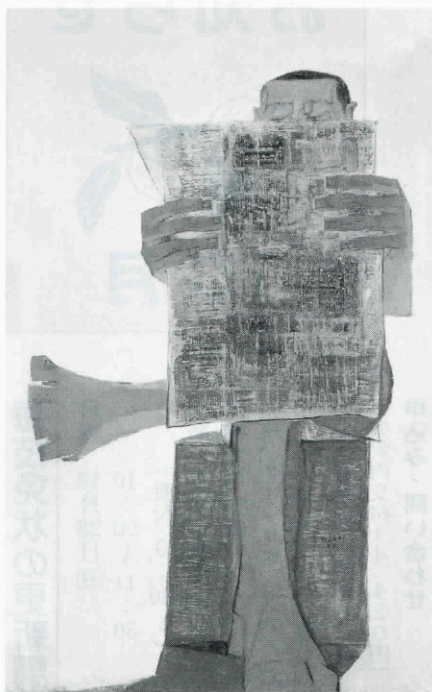




新聞 116.5×72.5 cm 油彩 1955年

平成13年10月6日(土)〜平成14年1月27日(日)

〈私の〉 人 (ひと) 展

人が最もいいものは人である

The message from

Y. Kazuko

Museum of Misumi

〜美術館からのメッセージ〜



運ぶ人 32.0×21.0 (油彩)

善人ぶつたのより
悪人ぶつた人間が好きである。
また事実その言動には艶がある。
艶、
それはわれわれの仕事には
欠かせぬ大事なものであるらしい。
―香月 泰男―

他人がいるから「ひと」は人らしくなる。早い話が人はみんなお互いに鏡であり、一番手近な鏡が自分である。

画学生の卒業作品には自画像があり、青年香月の面影は丹念に仕上がっている。その油彩から晩年の墨素描自画像へ至る途上で、香月も多くの人々に出会い、さまざまな他人を描いた。

しかし香月美意識に深く根を下ろしている東洋画への思い入れが「黒」という至高の色に辿り着いた時、あのシベリアシリズは名実共に無双の人間像と独自の歴史的事実を画布の上に定着させたのであった。例えば「神農」にせよ「運ぶ人」にせよ、一切の無駄と通俗性とを捨てた荘厳さはひしひしと迫ってくる。「ひと」という生物の内面をここまで掘り下げてみせた絵が他にあらうか。

とはいえ、人間の感受性は内へ向かうだけではない。石版画母子像にも、ニューヨークやタヒチの水彩素描にも、感受性の豊かさが溢れて「ひと」の眺めの楽しさがすっきりと伝わってくる。油彩から素描まで、香月の目と心の技の冴えが発見し定着させた魅力。「ひと」特有の哀歓と永遠の魅力。それは香月ひとりのものではない。どんな人の奥にもひそんでいるはずのものである。

町民文芸

俳句

清風句会

短歌

三隅短歌会

(順不同)

少年の記憶に胡麻を叩く音

しょうどう

コスモスや母の忌に寄る姉妹

高崎はま子

母の影探して仰ぐ盆の月

河畑ツル子

道の辺のコスモス笑顔で吾まねく

岩本さつき

夏休み終りし母の安堵顔

沖村美智子

千年の時を小粒に胡麻神話

長沼 康子

胡麻をする鉢を押さへる小さな手

こうしゅん

胡麻叩く音に目覚めの早き嬰

松田 妙子

エネルギー小さき胡麻よりもら

青海賀代子

路地裏の風をもらいし秋桜

大谷 つね

父祖よりの受け継ぐ畑の胡麻実る

森田 春一

コスモスに急ぎ影落つちぎれ雲

仁保 民子

百畳の本堂つつむ蟬時雨

富田佳津美

亡き夫の被りし帽子捨てがたく形

見の一つを箱にしまいぬ

松野美津子

ためらいつつ受話器をとれば指先の

リングの香り不意に流れ来

しょうどう

海軍の兵なりし日の思い出とてパ

ナマ帽子を愛しむ父は

立間 雅子

「お帽子はかぶらずお帰り下さい」

と美容師われにコート着せつつ

山中 敬子

盆帰りしてゐし子らの発ちしあと

汗して我は寝具を仕舞ふ

岡 松子

「きらら博」連れの帽子を目で追

いて人の流れにわが身をまかせ

河村 民子

異常気象に柿の葉色づき散りしき

て夏がれとなるさ庭いろどる

白井 麻子

自転車一度はよけし溝蟹を車が

ひけり紙のごとくに

伊藤 一郎